



Data

監督・脚本：ドロタ・コビエラ／ヒュー・ウェルチマン

出演：ダグラス・ブース／ジェローム・フリン／ヘレン・マックロリー／クリス・オダウド／シアシャ・ローナン／ジョン・セッションズ／エレノア・トムリンソン／エイダ・ターナー／ロベルト・グラーチーク

👁️👁️ みどころ

近時、ゴッホやセザンヌを主人公にした「伝記もの」映画が多いが、ゴッホの死因を訪ねる「探偵もの」は珍しい。そのうえ、本作最大の特徴は全編「動く油絵」で構成したこと。

白黒の劇画タッチの映画はいろいろあったが、「動く油絵」は重厚そのもの。原画の元になった俳優も大変だが、動員された100名以上の画家も大変。しかして、その出来は？あなたの賛否は・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■私たちはゴッホをどこまで知ってるの？■□■

近代絵画の父と呼ばれる印象派の巨匠フィンセント・ファン・ゴッホの絵は、一目見ればすぐにわかる。「ひまわり」や「郵便配達」等で有名なゴッホは「炎の画家」と呼ばれていたが、そんな風に彼が名声を得たのは死後のことで、生前はたったの1枚しか売れなかったそうだ。

本作の公式ホームページの「Introduction」には、ゴッホについて解説されているので、参照してもらいたい。

■□■本作の「ストーリー」は？■□■

本作の「ストーリー」については、公式ホームページを参照してもらいたい。

■□■全編を動く絵画で！その数なんと6.5万枚！■□■

映画の起源は、フランスのリュミエール兄弟が発明したシネマトグラフ。1815年1

2月28日にパリで、工場から出てくる人々を撮影した有名な『工場の出口』が世界ではじめて有料上映されたのが、現在の映画の原点と言われている。

それから約120年の間に映画の技術は飛躍的に進歩し、今では3D映画も定着している。そんな中、フランク・ミラー原作のハードボイルド・タッチの劇画を白黒基調でスクリーン上に登場させた映画が、①『シン・シティ』（05年）（『シネマルーム9』340頁参照）、②『シン・シティ 復讐の女神』（14年）（『シネマルーム35』115頁参照）、③『300 スリー・ハンドレッド』（07年）（『シネマルーム15』51頁参照）、④『300<スリーハンドレッド> ～帝国の進撃～』（14年）（『シネマルーム33』202頁参照）だった。また、『さよなら、人類』（14年）は、固定カメラによる1シーン1カットの撮影で計39のシーンを並べたもので、「映画は動く絵画」の思想を実践したものであった（『シネマルーム36』262頁参照）。

それに対して本作は、まずゴッホの名画をモチーフにした俳優たちの演技を実写映画として撮影。普通はそれを編集して1本の映画として完成させるわけだが、本作では世界から集めた125名の絵描きがその映像を元にして総数62,450枚の油絵画を描き、その油絵を1秒間に12枚のスピードで動かして映像を完成させたようだ。したがって、本作はまさに「動く絵画」によって作られた世界初の映画なのだ。

■□■この試みの成否は？当然賛否両論に二分！■□■

私は何でも新しいもの好きだから、本作がそんな新しい試みだと知り、「こりゃ、必見！」と思って試写室へ行った。もっとも、なぜゴッホを主人公にした映画で、ゴッホの死因を訪ねる探偵ものみたいなストーリーになっているの？それについて大いに違和感があったが見始めるとそんなことは抜きにスクリーン上で動く油絵の展開に目が釘付けに。しかし、如何せん人間は飽きっぽいもの。そんなスクリーン上の展開に目が慣れてくると、やはりストーリーの単調さに時々あくびも・・・。

シャーロック・ホームズや金田一耕助の探偵ものなら最後に必ず犯人を挙げるのが不可欠だが、ゴッホの死因については今日でも謎とされているから、ある意味、その結末のつけ方はどうでもいい。そのため本作では、そんなストーリーのアヤ(?)よりも、動く油絵に注目させることを目指したようだ。したがって、その成否については当然賛否が極端に二分されることになる。

ちなみに、『キネマ旬報』2017年11月上旬特別号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の映画評論家が一様に星3つをつけた上で持論を展開している。ここでは、「この奇妙な事態にたじろぐなというのは難しい」、「だんだん単調に見える」、「なぜこの手法なのかと観ながら思う」とあまり好意的ではない。それに対して、新しいもの好きの私はたじろいだわけでもなく、なぜこの手法なのかと思うわけでもないが、だんだん単調に見えたのは事実。しかして、あなたの感性は？評価は？賛否は？

2017（平成29）年10月26日記